

「青年の社会的自立と教育」の社会史的研究 —1950年代末から60年代はじめにかけての日本農村にみる学校から仕事へ—

橋本紀子

目次

- I. はじめに
 - 一 課題意識と研究目的および方法
- II. 聞き書き調査の概要及び文献調査による背景的事実:
- III. 調査の結果と考察
 - (1) 県外就職への動機と家族構成
 - (2) 就職先の決定に至る手続き、経路、勤務地への移動形態
 - (3) 就職先の戦前とのつながり、企業と学校の関係
 - (4) 学校における進路指導について
 - (5) 教師の立場から見た職業指導、就職訪問
 - (6) 就職先の労働条件と転職、資格取得
 - (7) 家族、故郷について感じたこと
- IV. おわりに-----残された課題

I. はじめに

一 課題意識と研究目的および方法

近年、青年が大人になりにくい社会になってきたという点について注目されるようになってきた。大学は出たけれど、就職はしない、できない「新卒無業」という事態も急増している¹⁾。ほんの半世紀前の日本社会では、多くの庶民の家庭では、子どもが早く一人前になることが親たちにとって何よりも重要なことだったし、子どももそのように感じて成長していった。戦後まもないころの農村部の二、三男はまだ、新制中学校を卒業してから数年間は親へのお礼奉公として、生家の農業を手伝い、それが済んでから、より賃金の高い県外への就職、たとえば上京するという慣行があった。しかし、これは徐々に新卒後すぐに県外に就

職する方が有利であるという情報の徹底や、お礼奉公や親への送金は考えずに自分の自立のみを考えていられる者の増加によって変化する。

1950年代後半にはいわゆる「集団就職」が始まる。加瀬和俊によれば、「集団就職」という言葉は、昭和30年代に固有の歴史的名称であり、毎年3月に、地方出身の主に中卒就職者が「集団就職列車」(1954年開始)で大都市に集団的に移動した事態をさす。この列車は関係する県(1962年からは交通公社)が企画して国鉄が協力した臨時列車であり、予定の就職者を各駅で乗せると途中の駅には止まらずに下車すべき都市まで直行した²⁾。

また、これは、都市部の集団求人に応じて新卒者が集団的に就職するという関係を意味していると言う。「集団就職」実施の要因としては、以下の3点があげられている。

第一、進学率の上昇と大企業の年少者採用の増加とによって、都市出身の年少者を雇用できなくなった都市部の中小企業・家族企業が地方出身の新卒者に採用対象を絞ったこと。

第二、地方における優良な就職機会・就職関係情報の不足と、都市での就職を求める新規学卒就職希望者の多数の存在。

第三、労働省・公共職業安定所にとって、この事業が新卒者職業紹介業務を拡張する有力な手段であり、求人条件の改善を誘導し雇用関係の近代化を実現する適切な手立てであったため、都市・地方の職安機構が連携して、積極的な推進体制をとったこと。

このように、集団就職は、労働市場において不利な位置にあった都市部の中小・家族企

業と地方出身学卒者とが、職業安定所の機能に依存する形で結合したものであったとされる³⁾。

「集団就職」は 1950 年代後半から 60 年代半ばまで続いたが、60 年代に入ると、高度経済成長期の好景気で人手不足となり、急激な求人難に陥る。特に出生数最低の 1945 年生まれの子どもたちが、中学を卒業した 1961 年には新規学卒者は金の卵とさえ言われた。

この当時の様子を現地取材したり、その後の追跡調査をしたりした先行研究には、『集団就職—その追跡研究—』(小川利夫、高沢武司、明治図書出版 1967)や『集団就職の子どもたち—その夢と現実』(早船ちよ、弘文堂 1965)などがある。また、職業指導の担当教師として事にあたった側からも「最後の集団就職列車」(遠藤彦次郎、『思想の科学』1975 年 8 月号)などの論稿が記されている。また、この人々を高度経済成長の担い手たちと言う観点から捉えたり、学校・職安と労働市場の関係、新規学卒市場の成立、制度化の過程から捉えようとしたものに、『集団就職の時代—高度成長のにない手たち—』(加瀬和俊、青木書店、1997)や『学校・職安と労働市場—戦後新規学卒市場の制度化過程』(刈谷剛彦・菅山真次・石田浩編、東京大学出版会、2000)などがある。この他、関連したものとして、戦後的青年期の解体を指摘し、青年の新しい社会的自立を模索しようと試みた『揺らぐ学校から仕事へ—労働市場の 10 代』(高生研、青木書店、2002 年)なども出版されている。

1945 年に生まれ、「集団就職」によって農村から都市へと移動した青年たちと同時代を生きてきた筆者は、限られた農村での生活体験からではあるが、当時、農村から都市への移動はもっと多様な形で行われていたのではないかと言う感触をもっていた。つまり、先行研究で述べられているような典型的な「集団就職」とは少し違う形で、郷里を離れ都市部に

向かった人たちもいたのではないかと、また、そこには、縁故就職も含め戦前からのつながりや、先行研究でも指摘されていた共同体意識がまだ濃厚にあったのではないかなどについてである。

それゆえ、本稿では、先にあげた先行研究に学びながらも、それらの点を当時、農村部から都市部へと移動した人たちへの聞き書き調査を基に当事者たちの生活の側から検討したい。また、彼らは 40 年後、その当時を振り返って見たとき、どんなことを鮮明に記憶しているのか、とりわけ、学校の進路指導や職業教育はかれらの生きる力になっていたのかなども考察したい。

研究方法としては、当事者、関係者への聞き書き調査と文献、資料調査を併用して行う。

Ⅱ. 聞き書き調査の概要及び文献調査による背景的事実

聞き書き調査の概要

対象者 ; 1945 年生まれ、1958 年 3 月秋田県横手市立黒川小学校卒業、1961 年 3 月黒川中学校卒業(男 3 人、女 4 人)と 1960 年度の担任(男 1 人)

調査年月日と場所、学歴;

① 2000 年 7 月 22 日、東京銀座で、男子:清五郎、新吾、章の 3 人(中学卒 2 人、大学卒 1 人)女子:美和子、昭子の 2 人(高校別科卒 1 人、高校卒 1 人)

② 2001 年 1 月 13 日、愛知県蒲郡市で、女子:栄子、富子の 2 人(中学卒 2 人)

③ 2002 年 3 月 17 日、秋田県横手市平城町 2 の 14、1960 年度担任、男子:藤沢先生 1 人(担当教科英語)

本論でこれらを引用の際には、調査①、②、③のように表記する。

文献調査により明らかになった当時の教育関係事項:

* 対象者たちの中学校卒業年度、1960 年

度の高等学校等への進学率は男子 59.6%、女子 55.9%、計 57.7%で、大学、短大への進学率は男子 14.9%、女子 5.5%、計 10.3%であった。

対象者の小学校 6 年時の生徒数は 53 人（男子 37 人、女子 16 人）であったが、違う中学校に進んだものも含めて、その後、高校まで進学したものが 20 人ほど、大学までが 4 人というもので、全国平均より少し、低い水準にあったと言えよう。

＊戦後の新制中学校では、1947 年に必修の「職業科」が置かれることになったが、その内容は農・工・水・家庭と職業指導であった。同年選択教科の「職業科」も設置されたが、その内容は農・工・商・水・家庭であった。その後、51 年に必修、選択とも「職業・家庭科」（4 類 12 項）となり、対象者たちが中学生になった 1958 年には必修が「技術・家庭科」（内容 2 系列、男子向きには工的内容、女子向きには家庭科的内容）職業指導も進路指導と改称するようになる。選択の方は「職業に関する教科」となり、内容としては外国語、数学、音楽、美術、農業、工業、商業、水産、家庭、その他があり、内容に応じて一つ以上履修することになっていた。対象者たちの中学生時代はまさに、この「技術・家庭科」と「職業に関する教科」の時代に相当する。

Ⅲ. 調査の結果と考察

(1) 県外就職への動機と家族構成

東京方面に就職した人たちに聞いた中では、まず、大家族だったことがその理由としてあげられた。たとえば、祖父母とその子ども 1 人、両親と自分たち子ども 3 人、自分の兄弟姉妹とその子どもの 2 人の四世代 12 人で暮らしていたことから、進路指導とかとは関係なく、末っ子の自分は家を出て行くものだとして最初から思っていたこと、したがって、誰かとの相談の結果ではなく自分の判断で決めたという場合。①

兄 2 人が中学卒業と同時に県外に出ており、高校に行きたかったがそのようなことを言える状況ではなかった。②

4 人姉妹の 3 女だが、4 歳上の次女が東京で働いていたので、当時は学歴のことなどを考えずに、早く卒業して東京に行かなくてはと思っていた。②

担任によれば、当時、黒川中学校の生徒の半数以上は就職希望者だったと考えられる。この地域は農村部で 8 割以上が農家だったから、現金収入が少なく、大家族で農業をやっていたから、本人は進学したいと思っていたかもしれないが、家庭の経済事情がそれを許さなかったと言うことである。高校進学率も旧市内の横手とはだいぶ違って低かったようである。③

(2) 就職先の決定に至る手続き、経路、勤務地への移動形態

姉が働いていた神奈川県のア野市の理髪店に同じように就職していったという純然たる縁故就職の形で県外に出た人がある。この地域には同じ村の先輩たちが、あちこちの理髪店で働いていたと言う。さらに、黒川中学校の先輩がいて、年々新人が送り込まれたという横浜市の洋服縫製会社への就職の場合もある。①②

就職先は家族とか、先生と相談して決める人が多かった。こうして、就職先が決まったら、卒業式のあとに、就職担当の先生がみんな（この年は 5 人）を連れて上京したが、父親が同行した人もいた。この年度は、東京方面は 1 回だけだったが、横手駅ではなく、黒川村により近い後三年の駅から、同級生に見送られて、出発した。上野駅についてから、先生はそれぞれの就職先にみんなを分配して歩くのだが、このときは、まず、二人の女子の就職先であった横浜の洋服縫製会社にみんなを連れて行き、昼食にざるそばをご馳走になっている。最後の人は夕方に就職先に着い

たという。①

職業安定所が就職担当教師のところに送ってきた会社の宣伝パンフレットを見て、一人で会社を決めたと言う場合もある。この場合には、職業安定所で適性検査のような試験を受けたという。近隣の中学校からも受験者があり、10人ぐらいが愛知県蒲郡市にある会社に採用された。この人たちは、卒業式も終わった3月24日頃に、まず、横手の職業安定所に集まって、それから横手駅に行ったと言う。会社の人が迎えにきて、10人ぐらいの生徒を蒲郡市に連れて行った。親もついていけないし、旅行にいくような感じだったと言う。②

当時の担任によれば、職安に最初から申し込んだ企業の場合には、横手駅で、職安の職員が人員を数えて送り出していた。会社から迎えがきている場合もあるが、東京方面の場合には、たいてい上野駅に会社の人が迎えに来ていて、そこで、みんなと別れるという、通常の集団就職列車のパターンをとっていたようである。③

この他に、中学卒業後地元の木工所、パン屋、タイヤ店などで半年ずつ、計1年半働き、その後、職業安定所で仕事を探し、一人だったから企業の人が迎えにきたと言う場合もある。①

(3) 就職先の戦前とのつながり、企業と学校の関係

・各企業の地域連絡員と職安

就職先の一つに大森というのがあったが、ここは、第2次大戦前中小の軍需工場が集まっていた地域であり、高等科卒の年少労働力を確保するために、中小企業家が連合して、夜間の学習を保障する大森徒弟学校を設立運営していた。ここに、秋田県の由利郡から、高等科卒業の生徒が先生も付き添って大量に就職していた。由利郡以外にも戦前、秋田から就職していった可能性は考えられる。

黒川中学校では、純然たる縁故就職によっ

て他家の家事手伝いに行くなども含めて、いわゆる縁故就職がまだまだ、大きな比重を占めていたことが伺われるが、学校と企業、職安の関係はどのようなものだったか。中学3年時の担任によれば、普通は会社からの派遣員が職安にきて、募集要項を渡して会社の内容を説明し各学校への宣伝方を依頼する、それで、職安から各学校へ募集要項なんかを送られてくる。あるいは、直接、学校に来る場合もあるが、普通は職安に寄って、どこそこの中学校に行くと言報告してから来るのが普通だったと言う。③

しかし、この他に、ある会社が地域連絡員として地元の人を雇い、各学校をまわって会社の実情を説明したり、募集したりする業務を委託するという仕組みもあった。当時、横手、平鹿に一人ぐらいいた。その人が、学校に来る前に生徒のことを知っていて家のほうに直接行き、その結果を、学校に寄って話していくということもあった。黒川の場合は子どもたちの先輩がいろんな会社に入っていて、そこからの情報が連絡員にも、子どもたちの方にも入っていた。③ したがって、必ずしも職安、学校を経由しなくても、就職先を見つける可能性があったということである。第二次大戦前の就職斡旋人(周旋人)にも似た、機能はこの連絡員はもっていたことになるが、関連文献によれば、これは、地元の元校長や教頭のように、地域の子どもの家庭の状況を熟知しているものがやっていたという。

(4) 学校における進路指導について

・いつ、就職と進学組みは分けられたか

中学2年時にそれまで全員で学んだ英語が選択となり、進学予定のないものは、選択の職業科を選ぶようになるが、これは、進路を決めるきわめて大きな転機となった。②

進学組みは全員英語を選択し、就職組みと農家を継ぐものは職業科をえらんだ。大体、志望は半々だった。②

本人の希望で選択はするのだが、担任が就職より進学した方がいいのではないかと思われる、または進学する可能性がある生徒には、説得をして変えさせることもあったと言う。したがって、実際には就職した人でも英語を選択した人はいたのである。③

就職指導の教員が就職相談を始めるのは、中学3年生の2学期の半ば過ぎからであり、担任もその段階ではほとんど子どもたちの就職の状況は知らされていない。当時は、子どもたちのために思って、就職先をあまり、おおっぴらにはしてはいけないということで、公表しなかった。卒業時に指導要録に進路について書くときも、永く保存されるものだから、直接会社の名前ではなく、県内就職とか、何県の紡績会社のような書き方だったようである。③

高校のほうは名前も記していたと言うことに比べれば、そこには、当時、就職せざるを得ない子どもたちに対して同情的な見解、社会的雰囲気があったことが伺われる。

・職業に関する教科はどんなことをしたか、何が役立ったか、どんな役割を果たしていたか

選択の職業科は、2年時から始まるが、これを就職指導担当の先生が受けもっていた。彼は、1年から3年まで必修の技術・家庭科、図工、美術などの担当だった。③

蒲郡に行った2人が職業科で習ったことで、覚えていたのは、そろばん、履歴書の書き方、漢数字の壱、弍、参などの文字を含めた領収書の書き方、小包の出し方、ときには学校のたんぼや畑で農作業、それから就職してからの心構えなどに関するものである。その一人は、先生が黒板に、“一生懸命に働かないとルンペンになる”と書いて、それを説明したときのことを口調も含めて、鮮明に覚えていた。そろばんと、漢数字などの書き方などは、実際に役立ったと言う。②

さらに、勤勉な労働観を培うと言う点では有効な教育になっていたようである。

担任によれば、必修の技術・家庭科では実務指導を中心にしていたが、男子は農業、女子は裁縫の実習が多く取り入れられていたと言う。③

(5) 教師の立場から見た職業指導、就職先訪問

職業指導は就職指導担当の教員が中心的にやっていた。年度末に就職していくと、その年の8月、夏休みに学校から職場補導ということで職業科担当の教員が、予算があれば学級担任も生徒に会うために会社を訪問した。藤沢先生も蒲郡などを2度ほど訪問したと言う。当時、蒲郡からは2-3の会社が黒川中学校にきていたようである。③

会社に事前に訪問の日時を伝えていくが、駅まで生徒たちが迎えに来ていたりする。生徒たちとの話は、会社のロビーのようなところや、応接室のようなところで、1-2時間行われるが、会社外に出るということにはなかった。健康状態とか、仕事の内容、待遇などで、契約時と違っていることはないかというようなことを聞いたが、あまり、厳しいとか言う生徒はいなかった。会社側は、そう長くは話させないという感じだったと言う。③

会社側としては、勤務中の訪問でもあったし、いろいろ話されては困るということもあったかもしれない。しかし、この時代には、戦前の高等科の教師たちがやっていた、職場補導という慣行がまだ、継続されていたことが注目される。当時、この職場補導は一面では、職場への定着率を高めるという期待が会社側にあつて、許容されていたと考えられる。

就職先の決定は、就職担当の教員と生徒が個別に面談して、家庭の方にも連絡して決めていくのだが、県内、特に横手市内希望者はなかなか決まらなかった。その理由は、求人が少ないにもかかわらず、親たちは農繁期には家の手伝いをしてもらいたいから、遠くには出さないということであつた。③

手伝えられる田畑があり、それで生活できる場合には長男以外でも遠くには出たくないというのが、親の希望であったと考えられる。

また、近くといっても、大工や左官などの場合は、丁稚奉公で、しかも何年間かはお礼奉公も必要になるので、農繁期に手伝えするというわけにはいかない。それ以外というと、鍋の蓋を作る工場とか瓦や土管を作る工場、地下足袋やゴム長を作る工場などへの就職ということになる。そこで1週間ぐらいは休暇をもらえた。③

兄や姉が県外就職しているとそれを頼って行くという傾向がみられたということや、県外就職した兄弟が、盆、正月に着飾って帰って来るのを見て、あこがれると言うのもあったようだという。③

黒川中学校の場合、就職先の紹介や相談は職業科と就職指導を担当していた教員が中心になって行い、担任は進学組の世話をしていたことになるが、就職先の訪問など卒業後も担任した生徒とは関わっている。都市部ではこのような慣行はみられない。これは、どの時代まで続いたのだろうか。今後、明らかにしたい点である。

(6) 就職先の労働条件と転職、資格取得

最初の就職先は、東京大森の町工場や、横浜の洋服縫製会社(比企商会)、神奈川県秦野市の理髪店、愛知県蒲郡市の伊達毛織株式会社、横手市の桑本木工所などである。その後、人によってはより労働条件の良い職場を求めて転職している。たとえば、向島用品と言う自動車部品会社から運送会社へさらに、東邦運輸商事という日本鋼管の子会社へと言う者、川崎のガソリンスタンドから蒲郡市の小林織布株式会社へさらに、結婚後枕カバー製造の自営業を営んできたと言う者、理髪店に住み込みながら、理容学校に通わせてもらい国家試験合格後5年間お礼奉公

をしたという者、横手市の鈴屋パンから小野寺タイヤ、次に横浜のいすゞ自動車の下請け会社へ、さらに東京立川の鉄骨組み立て工場では技術を習得し自営業を営むようになった者など。①②

労働条件という点では、会社の寮あるいは工場の2階などに住み込みで3食つき(食券を持って定食屋で外食もあり)というものが、一般的だったようであるが、比企商会の場合は、1ヶ月3食つき2000円で、1000円は天引き貯金をさせられていた。伊達毛織株式会社の場合3階建ての女子寮が建ち、1部屋7-8人で、給料は3食つき1ヶ月4000円だったという。川崎のガソリンスタンドでは、通いで1ヶ月中卒が8500円、高卒が10000円だった。担任の話によれば、当時、多くの者が天引き貯金をさせられていたようだという。①②③

また、1-2年後にはほとんど同じ仕事になるのに、学歴によって、給料に差がつくことから、学歴の必要性を実感したという者もいた。労働の場で、難しい文字を覚えたり、就業後そろばん塾で、そろばんを習い3級に合格したとか、転職先で、いろいろな資格を見につけたり、結婚後も高校生の子どもに教えてもらったりしながら、クレーン操縦士の資格をとった、鉄骨組み立て、自動車解体と整備技術を習得したなど、高度経済成長期の日本人の勤勉さと向上心旺盛な生き方が、見事に映し出されている。①②

当時、年少労働者の職場への定着率の低さと転職の多さが問題にされていたが、中小企業の労働条件の悪さ(住宅の狭さや、食事量の少なさ、長時間労働など)が、その一因で、彼らの多くは、新聞広告や職安の職業紹介を通じて、転職先を探し、より労働条件の良い職場へと移動していった。つまり、中学を卒業した時点で、否応なしに一人前の自立した労働者として社会に向き合って生きることを要求されていたのである。

また、転職の理由には定時制高校に行かせてもらえるつもりだったのが、それがだめになったからというのもあった。蒲郡市の伊達毛織株式会社に就職した2人のうち男子の方は、そのため、転職していったという。②その職場は秋田県のほかに、岩手、長野、石川、鹿児島、静岡などからも集まってきたが、3年以上経つと大体半分はやめていったという。残った彼女は15-22歳までの7年間働いて、22歳のお盆まででやめたというが、当時はまだ、盆とか正月が区切りだったということである。② 1960年代というのは、労働慣行の点ではまだ、戦前とのつながりがあったことが知られる。

(7) 家族、故郷について感じたこと

当時、このような状況に置かれた彼らは、それをどのように感じていたのだろうか。理髪店で働いていた人は、寂しかった、田舎が恋しかった。母に会いたいと思ったと言っている。早朝に起こされての眠い毎日が、それに拍車をかけていたようだ。他の人も、金の卵などと言われて就職したが、なんの資格もないし今では中卒では、働けないとか、まだ、15歳だった当時の自分たちのような、人生への旅たちが今の子どもたちには考えられないとも語っている。①

現在、父も母も亡くなって、故郷は遠くなったと言う意見もあったが、仲よしだった友達に会いたいから、毎年帰るという者もいる。鮭と同じように毎年故郷に帰ってみたい、どうってことはないけど香りが違うという。東京の暮らしは、すごい競争だ、こっちは住むところじゃない、田舎は、やっぱり、ほっとするという意見。田舎は自分が解放される。こっちは、住まなければならないからいるようなものだという者。

①

これまでの、厳しい人生がしのばれるような意見だが、望郷の念は15歳まで暮らした故郷での思い出、共同体意識の形成などを基

盤に引き起こされていると考えられる。彼らの語った思い出の中からもその点は推察される。

雪が降る季節に、毎日同じ集落の身体に障害のあった同級生を箱ぞりにのせて雪をこぎながら、学校へ連れてきたと言うような友達への自然な思いやり、餞別を持って村を離れる友人を駅まで送っていったなど、① 同じ村落共同体のメンバーであるという強い意識が前提にあったと思われる。もとより、当時でも、厳然として、村には、階層差や、貧富の差、各家々の置かれた事情や考え方の違い、背景的な文化の違いなどがあったことも事実である。また、そこに残ってその後、暮らしてきた人たちから見れば、このような望郷の念は、その後の村の変貌を度外視した幻想でしかない指摘されるかもしれないが、村を後にした人々には、故郷の山々や、季節ごとの香りなどまさに、鮭の還流のごとく懐かしい生命の原点、エネルギーの源なのであろう。おまえ達が高校に行っている頃、俺は木工所で働いていたと言う発言は、① こうして働いてきた自分の人生への賛歌とも言える自信に満ちたものであった。

筆者も秋田市のミッション・スクールに入学することになって、彼らより、3年も早くみんなに後三年の駅まで送ってもらった。中1から短大2年まで120人、上級生と一緒に一部屋6人という学生寮に入ったが、初めの頃は夕方の食事時になると無性に家の夕餉の様子が思い出され、望郷の念にかられたことを思い出す。彼らは、私とは比べ様のないほど、日中の労働や人間関係での大変さがあったと考えられるが、家族、故郷への思いの点では共通するものをもっていったことが伺われた。

おわりに-----残された課題

3回の聞き書き調査とそこで、収集した資料などから1950年代末から60年代ははじめにかけて、農村部から都市部へ就職していった

青年たちの多様な生活経験の一端を整理してみた。その結果、この地域では、この時代でもまだ、縁故就職が多く、職場補導、労働慣行などの点で、戦前との連続性がみられるという点や、村落共同体意識もまだ濃厚にあったという点などが確認された。さらに、鮮明に覚えていたこととして、2年時の英語か職業科の選択による進路の分岐があげられる。また、選択の職業科の内容は実用的なもので、勤労観も含めて人によっては、鮮明に記憶に残るものであったことも確認できた。

今回は終戦の年に生まれた人たちが対象であったが、その前後ではどうだったのか、秋田県全体の中学卒業者の就職に対する施策あるいは統計的動向はどうだったかというような点に関する文献、資料調査が今後の残された課題である。さらに、卒業式後に小学校時代も含めて多くの先生たちや同級生に書いてもらったサイン帖を持っていた人がいたが、そこには、勤勉で前向きに、真摯に人生

に立ち向かうことを当然とし、賞賛していた高度経済成長時代の日本人の精神世界が映し出されている。これらの資料の検討、分析も今後の課題である。

〔注〕

- 1) この状態は『新卒無業』大久保幸夫、東洋経済新報社、2002年等に詳しい。
- 2) 『集団就職の時代―高度成長のにない手たち』加瀬和俊、青木書店、1997年、143頁
- 3) 加瀬、前掲書、148頁

以下に、3回の聞き書き調査を今回のテーマに関わるところを中心にして、資料として掲載することにした。

資料1:「集団就職をした人たちへの聞き書き調査」その1

日時 2000. 7. 22

場所 東京、銀座

対象 1945年生まれの人、男性3人、女性2人

秋田県横手市立黒川小学校、黒川中学校出身者 1961年3月同校卒業

清五郎(中学卒)新吾(中学卒)美和子(高等学校別科卒)

昭子(高等学校卒)章(大学卒)・・・(仮名)

* 清五郎さんの場合

紀子:まず、当時のあなたの家族構成について教えてください。

清五郎:祖父母とその子ども、つまり、おじさんが1人、それに両親と兄貴夫婦とその子ども2人、それに私の兄弟が私も含めて4人いた。(私の兄弟は5人で男4人女1人)

紀子:大家族だったんだね。12人が一緒に暮らしていたんだ。あなたはそこで、末っ子だったのね。兄3人に、姉1人いたんだ。

紀子:次に、当時の進路指導とか、進路相談というのは、学校でどのように行われていたのか教えてください。

清、美、昭:特別なかったように思う。

清五郎:自分を出ていくものと最初から思っていたから。他の人はわからないけど。自分に関しては、進路指導とかとは関係なく、自分の判断できめた。

昭:就職の相談とかは鎌田先生がやっていた。1、2年の時担任だった先生。

紀子:清五郎さんなんかは、そういう先生に特別相談しなくても卒業したら東京に出ていくと決めていたわけね。

美、昭:会社の求人なんかは、学校に来ていた。すでに先輩が就職している会社なんかから直接学校に求人が来るのが多かったんじゃない。

紀子:学校に職安から就職の担当の先生のところにくるといことは?

美和子:それも、あったかもしれない。

紀子:それで、就職先は学校に来た情報を鎌田先生なんかから聞いてさがすわけね。定期的に就職相談なんかするわけではなく、学校に来た情報を先生がみんなに流して、行きたい人は相談するという形ね。

清五郎:就職先は家族とか先生と相談して決めていたと思うよ。

紀子:そう。それから、上京するときのことなんだけど、私、1回だけ後三年の駅に送っていったことを覚えているんだけど、どんなふうにして、みんなは東京に行ったの?それぞれ、行き先が違っていても、3月の末とかに日時を決めてみんな一緒に行ったの。

美、清:就職担当の先生がみんなを連れて上京した。東京方面は、1回だけだったんじゃない。一緒に来た人は京子、富子、勝夫、美和子、清五郎ともうひとり就職組でない石山がいた。(グループに分けて行くほど多くはなかった。鎌田先生が5-6人を引率した。中京方面はまた別にいったらしい。)

美和子:私はこのとき父も一緒に行ってくれた。先生は、みんなをそれぞれの就職先に分配して歩いた。

紀子:まず、上野に着くんでしょ。そこに、就職先の人が迎えに来ているわけではないのね。

清五郎:迎えに来ている人なんて1人もいなかったね。先生がみんなを分配するんだ。俺は最後になって夕方に着いた。上野についてからみんなをまず、横浜に連れていった。京子さんの就職先だ。そこで、昼食にざるそばをだしてくれた。誰もすぐに食べないから、どうやって食べればいいのかわからなくて、つゆを上からかけてしまったら、じゃあー、じゃあー流れてしまって大変だった。この、ざるそば事件は忘れられない。京子のところの工場は、寝るところが屋根裏部屋で驚いた。

紀子:それじゃ、ほとんどの人が横浜近辺だったの。

清五郎:俺は大森だった。大森の馬込町。

紀子:ああ大森だったの。戦時下にはたくさん中小の軍需工場があつて、そこに秋田の由利郡から高等小学校を卒業した子どもたちがたくさん先生に連れられて就職していつているのよ。
(大森徒弟学校の話などをする。)

清五郎:当時は金の卵なんていわれて就職できたけどなんの資格もないし、今じゃとても中卒では働けない。

美和子:寂しかったわ。田舎が恋しかった。

清五郎:まだ、15だで一。

昭子:今じゃ、考えられないね。

清五郎:今の子は苦労していないし。なんでも手にはいるし。

(当時の写真を見て話が盛り上がる。親を助けて、家事、育児をにないながら学んでいた同級生のことなど。)

紀子:話は戻って、就職先はどんなところだったの?

清五郎:町工場だね。下が工場で、上が住宅になっている。住み込みでね。そういう町工場が大森にはたくさんあつた。そこへ、北海道からとかたくさん就職してきた。山の方には、大田区山王にはすごいお屋敷が多かった。

美和子:私は姉が大森に嫁いでいたから、大森にはよくいったわ。私は理容学校に行っている頃京子さんたちのところに行ったことがある。あすこは、洋服を作る工場だったと思う。

*美和子さんの話を中心に

紀子:美和子さんはどこに行ったの?

美和子:神奈川県のア野市の理髪店に行ったの。姉がその理髪店で働いていたので、そこに行つて、そこから理容学校に通わせてもらったの。あの野球のY校の別科でね、その家の家事手伝いをしながらだから、眠くて通学の時、乗り換えのところでみんな降りたのに、自分だけ眠っていて、恥ずかしい思いをしたことがあつたわ。そういうことは、よく覚えているものなのよね。学校を出てから、そのお店で、5年間国家試験が受かるまでお礼奉公で働いた。当時、あの近辺には黒川の人で、理髪店で働いている人が、結構いたのよ。

奥さんがヒステリイで大変だった。母に会いたいと思ったわね。朝早く起こされるから眠くて眠くて。田舎に帰りたいと思った。その後、結婚して、子どもを育て、姑を92歳までみたわ。13年も寝込まれると大変。九州出身の夫に死んだあと、常になく感謝されたわ。

*清五郎さんの続き

清五郎:大森の工場には食堂がなかったの、近くの定食屋さんで、朝、昼、夜と食券をもって

外食した。(ひとしきり、食べ物の話)

労働が厳しくて、体をこわして半年でここをやめた。新聞の広告をみて仕事を探した。次に、働いたのが葛飾区堀切7丁目にある自動車の部品工場で、向島用品という会社だった。浜中雄三という共産党の人がやっていた会社だ。ここに、住んで、虎ノ門の支店に行った。家族の人と一緒にご飯食べたことがあった。遅く帰ってきて、最後だと思って娘さんのもみんな食べてしまったことがあった。ここで、いろんな資格をとった。20歳すぎまでここにいて、その次に江東区北砂町にあった運送屋に勤めた。この頃に女房と知り合った。当時、彼女は東京製鐵に勤めていた。24歳で、結婚。子どもは男1人、女1人の2人。息子は、小さいときから算数やゲームのようなものが好きだったので、小6でコンピューターを買ってやった。その後、東京電気大学工学部に進んで、システム、エンジニアになった。いまは、日本システムウエアというプログラム会社に勤めている。俺も今は東邦運輸商事という日本鋼管の子会社に勤めているが、クレーンの操作の資格を取るときには、当時高1だった息子に教えてもらった。なんだ、こんなことも分からないのかとか言われて。(奥さんは、短大を出ていたが、息子の方が聞き易かったらしい。彼は長女だった妻の父親に気に入られて、長男がいたのにも関わらず、彼女の実家のビルを彼女と共にひきつぐことになった等を話す。)

美、昭：愛知には、栄子さんや、秋穂さんが織物工場に行ったり、司さんは、大工の親方のところに住み込みの見習いに入った。愛知のグループは、別の日に別の先生に送っていったもったんだろうね。

美和子：紀子さんが、秋田の中学に行くというとき、何かの用事でその日、後三年の駅まで送っていけないと言うので、姉と前の日に挨拶に行って、帰り際に”マメでな”と私が言ったというので、家の外に出たとたん、子どもなのに、そんな大人の言うような言い方をしておかしいと姉が、きやつきやつと笑って歩けなくなったのを覚えている。でも、結局送っていくことができ、後三年の駅まで行った。隆一さんと清朗さんなんかと、餞別のつもりだったと思うけどパンを買って持っていった。

(当時、村を離れる友達を、駅まで送るというのが普通のことだったが、私は、みんなより3年前に送ってもらったのだ。同じ部落で、よく一緒に遊んだ美和子さんはよくその時のことを覚えていた)

* 当時の子どもの生活

美和子：栄子さんは、かじかとの名人だった。お弁当のおかずによくかじかの煮付けが入っていた。蒔子さんのお弁当になんだか四角くてひらぺたいものが入っていて、卵焼きでもないし、それなあいつて聞いたらへびだっていったの。それを、聞いたとたん、ぞっとして、自分の弁当も食べられなくなってしまった。そういうのは、忘れられない。

清五郎：それは、蛇の蒲焼きだよ。余目で、ヘビを干している家があった。青がエルを飲み込んで、膨れているままのだったりして、それは、とても俺も食べられないな。でも、当時は犬だって食ったんだからなあ。豆腐とネギを入れて、七輪で。春飼ってその年の冬食べる。毛皮はなめし革にする。背あてにするんだ。

昭子：ウサギは食べた。ウサギは飼っていて肉は食べて、皮は背あてにした。京子さんの家に持って行って、解体してもらった。寺村に、鳥屋があった。そこに持っていけば、鶏を絞めてく

れる家。

清五郎:よつこの家だろ。犬も、山羊も、うさぎも飼っていたのを食うんだ。俺は、食えなかったなあ。青臭くて、かわいそうで。

紀子:自分の飼っていたのを食べたの。

清五郎:春、子犬でもらってきて散歩したりして育てたのを、冬、鍋にしてしまうんだ。かわいそうで、涙を流してみている、食べられないでいると、暖まるから食べれ、寝小便しなくなるから食べれって言われたなあ。犬の毛皮は暖かいんだよ。ウサギの皮も。

昭子:雪が降るようになると、清五郎さん毎日同じ集落の京子さんを箱ぞりにのせて学校に連れてきたね。途中でひっくり返しちゃったりして。でも、よく何年も毎日連れてきたね。

清五郎:必ず、アメくれるんだよな、それ、ほしくてやってたのかなあ。かわいそうじゃない。大雪で元気な子どもでも毎日学校にくるのは、大変なんだから。それで、毎日一緒に雪こいで学校に来ていた。

昭子:優しくったんだよ。

美和子:京子さん2-3年前に離婚したんだってね。今どうしているのかな。

清五郎:結婚してたのか。

昭子:1人でいるらしよ。

紀子:余の目の京子さんて？

美、昭:背中にこぶのあった人、疎開してきた人で、“こじゃくし”の娘だった人。

昭子:今ならそういう人をいたわるより、いじめの対象にしたりするのに、この人は毎日箱ぞりにのせて連れてきたんだよね。

紀子:その箱ぞりは知っている。42のお払いの時来てたよね。その時は結婚してたよ。

(この後彼女に子どもがいたことや、結核になったころ病院におみまいにいったなど)

新吾さん遅れてくる

*新吾さんの卒業後

新吾:俺は、中学卒業してから1年半ぐらい田舎にいた。おまえたち(昭子、章)が高校に行っているころ、俺は、横手の桑本木工所で1年ぐらい働いた。マナイトとか卒塔婆、なべのふたなんかを作っていた。工程でいけば仕上げの仕事だね、それをやっていた。それから、鈴屋パンに半年いた。次に、小野寺タイヤでパンクの修理をした。半年ほど。

紀子:それじゃ2年ぐらい働いていたの。

新吾:うん、東京に来たのは17歳のときだから。母親はまだ元気であるよ。東京に来るときは横手の職業安定所で探して1人だったから、企業の人が迎えに来た。横浜の鶴見、いすゞ自動車の下請け会社だった。そこには、半年ぐらいだったかな。(そこも、半年の声)そこも、仕上げやっていて、それから、立川の方に来た。義理の兄貴のところで鉄骨を覚えて20歳から自分で商売を始めて現在に至る。

清:その頃は、スクラップはもうかっただろうよ。相場でもうけて、1ばん景気のいい頃だ。

新吾:始めた頃は西も東もわからないから10年ぐらい大変だったよ。質屋がよい。それからなんとかやってこれた。鉄骨は2年ぐらい。その後、自動車の解体、家の解体、車の整備中古販売などなんでもやる。

清五郎:今はなんでもやれないとやっていけない。そればかりじゃだめだ。

章、昭子、新吾:御嶽山に登った話。還暦のときは田舎で同級会をやるかっていう話。生きてい

れば行こう。幹事は章しかいないの声も。

清五郎：父も母も亡くなった。

美和子：親が亡くなるとふるさは遠くなる。

清五郎：でも、俺は5月にいつも帰る。幸之助や幸太郎に会いたいし。(3人友達だった。)寺村で、隆一には会った。寺村の神社、後三年のあたり変わった。温泉できたし。

新吾：駅のそば屋、今川焼き屋などまだあったぞ。

美和子：男の人もやっぱり田舎は恋しいものなの。

清五郎：“鮭”と一緒に。やっぱり帰ってみたい。どうってことないけど香りがちがう。

新吾：こっちに来て永いけど、やっぱり田舎はいい。こっちは、競争じゃん。すごい競争じゃん。ほんとに、ほっとするもの。海に行って釣りをしている時と一緒に。そのときは、仕事のことも何も考えないでいられる。こっちは住むところじゃないな。俺、つくづく思う。

清五郎：田舎は自分が解放される。こっちは、住まなければならないからいるようなもので。

新吾：子どもがあと1年で高校卒業するから田舎に帰ろうと思っている。お袋をみなきやいけないし、妹にまかせつきりだから。兄も姉もみんな死んじやったから、残っているのが妹と俺だけだから。1月に1回だけ電話はしてるけど。妹は横手市内にいるし、母は実家に1人でのいる。こっちに来ていっていても来ないし。遊びにも来ない。

美和子：私の母も遊びに来てても、すぐに帰りがる。お母さんはお元気なの？

新吾：母は元気はつらつオロナミンCだよ。今は、仕事をしていない。(病院の付添婦をしていた。)

資料2:「集団就職をした人たちへの聞き書き調査」その2

日時: 2001.1.13

場所: 愛知県蒲都市

対象: 1945年生れの女性2人

秋田県横手市立黒川小学校・黒川中学校出身者、1961年3月同校卒業

栄子(中学卒) 富子(中学卒)・・・(仮名)

★ 富子さんの場合

富子: 私は最初は、清五郎、京子、美和子さんたちと上京し、横浜の比企商会という洋服を作る会社に京子さんと一緒に就職したのよ。(住所は横浜市西区伊勢町4の165、栄子さんのサイン帳にのっていた)

洋裁の仕立て屋さんなんだけど、黒川中学校の先輩がいて、年々新人が送りこまれたの。

戸部駅(?)の近くに工場があった。

最初はアイロンかけやボタンホールの穴かがりで“はさみ”はすぐには持てないようになっている。流れ作業でどんどん作業をすすめていく。

ここは、第1と第3日曜が休みで、夜も夕食を食べてから残業することもあった。姉も東京で働いていたので休みの日には姉と一緒に東京にいるおじさんのところに遊びに行った。ここは1ヶ月3食つきで2000円の給料だったが、そのうち1000円は天引き貯金をさせられていたので、ほとんどお金を使うことはできなかった。おじさんはあまり条件が悪いというので、他に仕事を探してくれた。会社には母親の具合が悪いから田舎に帰ることにしたということで8月までにやめた。

転職先は川崎の大きなガソリンスタンドだった。ほとんど高卒の社員だったが中卒でも採用してくれた。ここで計算のためにそろばんが必要になって、夜にそろばん塾に通った。中学の時、少しやっただけだったけど3級まで合格した。そろばんはおじさんの子どもが昼使ったのを夜貸してもらって、同じ塾に行っていた。

紀子: 具体的にはどんな仕事をしたの

富子: 私は伝票書きを専門にしたのよ。

例えば、〇〇運送とかって来るでしょ、そしたらそれをすぐ伝票に書いて計算して、ガソリンが入れ終わるまでに渡さなければならないから忙しいのよ。朝なんか、一度に次々にやってくるから大変なのよ。ここで漢字をたくさん覚えた。ここで覚えた字は忘れないわね。いちいち手で書いて渡すんだから。ここでは、中卒が8,500円、高卒が10,000円だった。1~2年もするとほとんど同じ仕事になるのに、同じ仕事をしていても学歴によって給料が違う。ここで、学歴が必要だと思った。おじさんのところに下宿していたけど、そこに3000円払って残り5500円しかないでしょ。それで昼食をとったらお金はあまりたまらない。そんなこともあって、18歳になってから蒲都市の竹谷町に来たの。

紀子：どんな会社に来たの

富子：小林織布株式会社という綿や白木地を織る織物工場だった。私は1月に来たけど、妹は同じ会社に3月に来た。親も末子の妹を一人遠くにやるのが心配だったから、ちょうどいいと思ってそうしたの。

こっちに来るまで栄子さんが近くにいてわからなかったんだけど、私の会社は栄子さんの隣の工場だったのよ。近所の風呂屋さんで秋田から来てる人がいるって言うんで、良く聞いたら栄子さんだったんだ。

紀子：それでは、栄子さんの話を聞かせて。

★ 栄子さんの場合

紀子：栄子さんは何人兄弟だったの？

栄子：兄2人と妹1人の4人兄弟だった。それに両親の6人家族。進路は、会社のパンフレットを見て決めた。親は遠くて反対したんだけど。私も高校には行きたいとは思っていたけど、兄が2人とも中学を卒業して働いていたから、就職することにした。（そんなことは言えなかった）

横手の職業安定所を通じて就職したの。そこから鎌田先生のところにパンフレットも配られたと思う。職業安定所で適性検査のような試験を受けたのを覚えている。私の就職したのは蒲郡市にあった伊達毛織株式会社というのだったんだけど、黒川中からは私と吉方秋穂さんだけだった。その他に、横手第一中学から2人、大森中学から1人、新山1人、十文字1人、鳳中1人、雄物川1人から2人で10人くらいが就職した。

3月15日が卒業式だったから、たぶん3月24日頃にまず横手の職業安定所集って、それから横手駅に行った。そこには会社の方から迎えの人が来ていた。10人ぐらいの生徒を連れて会社の人は蒲郡に向かった。親はついていけないし、汽車にのって旅行に行くような感じだった。（お弁当をもっておしゃべりして）

紀子：会社はどういうところだったの？

栄子：寮があった。3階建ての鉄筋の女子寮が建った。1部屋に7～8人いて、8部屋あったから60人弱ぐらいの従業員寮だね。男子は10人ほどこな。秋田県だけでなく、岩手、長野、石川、鹿児島、静岡などから集まってきた。

3年以上たつと、大体半分はやめていった。

吉方さんも、この会社で定時制高校に行かせてもらえるつもりでいたのが、だめだったのでやめたのよ。

最初の給料は1ヶ月4000円だった。

ここで、15才～22才までの7年間働いた。

22歳のお盆まででやめた。当時は、盆とか正月が区切りだったから。付きあっていた人と別れて田舎に帰ったんだけど、縁があってその人と一緒になることになって8ヶ月田舎にいて、またこちらに出て来て、23才の4月に結婚したの。田舎に帰っても兄のお嫁さんがいたりして、居場所がなかったしね。

紀子：どういう家族のところにお嫁さんに行ったの？

栄子：5人兄弟姉妹の長男だった。おじいさんと夫の両親と小姑4人と私達夫婦の9人家族だった。長男と末子の4女とは14才も違った。

子どもは男1人と女2人の3人産んだけど24才の時長女、28才の時次女、30才の時長男で、12人家族という時もあった。

結婚した時、末子の小姑は小学校5年生で、小6の時に長女が生まれたから、おばさんとは呼ばせないで、名前呼びあって兄弟のように育った。

紀子：富子さんはどんな家族構成だった？

富子：私は女だけ、4人姉妹よ。その3番目だった。長女はあととりで実家にいたけど、次女は私より4才年上で、東京で親戚のところで働いていた。

これを見ていたから、中学の時は学歴のことなんかあまり考えず、早く卒業して東京に行かなくてはと思っていた。でも就職して、同じ仕事をして高卒の人の方が給料がいいということがわかって、学校は出なければいけないと思った。それで長女は短大にまで行かせた。私は20歳で結婚して、女の子を3人産んだ。

21歳の時長女、23歳の時次女、31歳の時3女を出産している。

ずっと枕カバーを作る仕事を自営業でやっていたけど、不況で大変になって、整理してしまったら、今は逆に楽になった。

たまに田舎に帰ると同級生に会うこともある。

同じ部落に長太郎(1945.8.15)、富子(8.22)、清(8.29)と3人1週間違いでいたことなど……

紀子：進路を決めるときに何か、学校で指導とか相談とかあった？

富子：進路を決めるときというのは、具体的には、中学2年の時点で一つの大きな転機があった。中一まで英語はみんな一緒に授業をしていたが、中二になる時、英語と職業科の選択があった。進学組みは英語を選択し、就職組みと農家を継ぐ者は職業科を選んだ。大体、半分ずつ【25名ぐらいずつ】だったと思う。

栄子：就職した人でも美和子さんや秋穂さんのように英語を選んだ人もいたが、進学組みは全員英語を受けないとだめだということで、中三になって英語に変わった満さんのような人もいた。【反対に、秋穂は就職が決まって職業科にきていた】

紀子：職業科ではどんなことを習ったの？

富子：職業科の先生は鎌田先生だったが、彼は職業家庭科、図工、美術などの担当だった。

習ったことは、そろばん、履歴書の書き方、漢数字の壱貳参などの文字を含めた領収書の書き方、小包みの出し方、たまには、学校の田んぼや畑で農作業、それから就職してから心構えなどを話してくれた。黒板に、一生懸命に働かないとルンペンになると書いて、それを説明したときのことを覚えている。(くちまねをしてくれた) こういう、‘働くということはどういうことか’などのようなことを黒板にパーと書いて授業をしたりもした。

資料3：1950年代後半の東北農村における進路指導に関する聞き書き調査

日時：2002.3.17.

場所：秋田県横手市平城町2の14

対象：藤沢恵二先生

秋田県横手市黒川中学校 1960 年度卒業生の中学 3 年時の担任
担当教科は英語

午後1時半過ぎに藤沢先生と会い、先生のお宅へ向かう。

奥様もお茶の用意をして、待っていてくれたので参加することになる。

紀子：美和子さんの紹介で先生のところにお伺いすることになりましたが、私は資料としてお送りした愛知の栄子さんと富子さんの他に、東京で章さんや、晶子さん、美和子さん、清五郎さん、新吾さんにもあって、話を聞いています。愛知のふたりは、職業科のことや、集団就職のことを割合よく覚えていたので、生徒側からみた当時の状況はよくわかったのですが、進路指導などをした先生からも当時の状況を伺えればと思います。

藤沢：当時の資料としてはとくにないんです。

紀子：覚えていることを思い出していただければいいんです。

藤沢：当時は今ほど学校における教育内容が細かく分かれていなかったもので、大きくは学習指導と生活指導にわかれ、その他に、特別活動としての生徒会指導や、進路指導としての進学就職指導があったと思います。1958-60 年当時、黒川中学校の生徒の半数以上は就職希望者だったと思います。この地域は農村部で8割以上が農家だったから、現金収入が少なく、大家族で農業をやっていたから、本人は高校に行きたいと思っていたかもしれないけれども家庭の経済事情がそれを許さなかったということです。そういう子どもが多かったと思います。黒川の場合と旧市内の横手とは地域差があったと思う。1中2中、もう3中もできてたかもしれないけど、町部とは、高校進学率が全然違っていたと思います。

紀子：栄子さんが言っていたんですけど、職安で就職試験を受けたということです。何校かの生徒が集まって。

藤沢：そうです。まず、普通は会社の人職安にきて、募集要項を渡して会社の仕事の内容を説明したりして、よろしくと挨拶するんですね。それで、職安から各学校へ募集要項なんかを送られてくるのです。あるいは、中学校に直接くることもあります。

紀子：一般的には地域の職安に募集要項が送られてくるということですね。

藤沢：そうです。もし、中学校に来るときでも、まず、職安によって、どこそこの中学校に行くと報告してから来るのが普通だった。

その他には、当時地域に出張員というか、連絡員というような、何ていったかな、そういう地元の人を会社が 手当を出して学校に説明に行かせていたんです。

紀子：会社が地元の人を雇って いたんですか。それで、就職斡旋人のようなことをやらせていたということですか。

藤沢：委託ですね。おそらく、横手、平鹿に一人ぐらいいて、その人が、学校にきていろいろ会社

の実情を話したり、、、

紀子：それは、一つの会社が委託しているのですか？何社かが連合して頼むとかではなくて。

藤沢：一つの会社です。

紀子：それじゃあ、何とか紡績とかの連絡員が各学校をまわって、子どもたちを募集して連れて行くというようなことになっていたんですね。

藤沢：そうです。また、その人が、学校へ来る前に生徒のことをもう知っていて、家の方に直接行くこともあります。その結果、学校によって話し合っていくということもありました。それだから、私は就職指導には、全くタッチしなかったわけですよ。

鎌田先生が就職指導をやっていたのです。

紀子：私の同級生たちは中一、中二の担任が鎌田先生で、中三が藤沢先生だったんですね。

当時の先生の担当教科は何だったんですか？

藤沢：英語と数学だったかな？だから、進学クラスの方をみるというか指導することになっていたんですね。黒川の場合は大分、子どもたちの先輩がいろんな会社に入っていて、そこからの情報が入っていたと思います。隣の誰それがどこの会社に行っているとかいう情報ですね。

紀子：ああ、そうすると、その先輩の話から連絡員が、直接、隣近所の家を訪ねるということもあり得たわけですね。

藤沢：はい。

紀子：戦後の集団就職を扱ったこのような本では、私の同級生たちが卒業する年には、中学卒業生は金の卵とかいわれているんですよね。先行研究で扱われているのは、多くが岩手の例で、もっと大規模に集団就職列車に子どもたちを乗せているんですね。秋田の場合は戦前の生活綴り方の研究は割合ありますが、本格的に集団就職を扱ったものはほとんどないと思います。それで、この周旋人というような人というのは戦前の場合とつながっていますよね。

藤沢：担任はどの子どもがどこへ行くとかいうのは、最初あまりわからなくて、就職指導の先生が中三の二学期の半ば過ぎから就職相談を始めるんです。あまり、おおびらにしていけないということで、公表しなかつたんですよ。卒業の時に指導要録に進路について書くときも、永く保存されるものだから、直接会社の名前ではなく、県内就職とか、何県の紡績会社のような書き方だったと思う。高校進学の場合は高校名も書いたと思うけど。

紀子：以前に聞いたときに、清五郎さんなんかは、もう小さい時から卒業したら県外に就職すると決めていたから、べつに就職指導がいつ始まったとかはあまり、関係ないといっていました。家族が兄夫婦の家族も含めて12人もいたということで、自然に最初から自分の判断で就職と決めていたということです。

藤沢：そうですね。家族が多かったから。

紀子：誰にも相談しなかったといってましたね。栄子さんなんかは、会社の人を迎えにきたと言っていました。この人たちは、5人ぐらい鎌田先生に引率されて上野まで行ったと言うことです。

藤沢：当時、就職するっていうと集団であろうが、集団の場合にはたしか横手駅に集まって、

紀子：後三年駅ではなく、横手駅ですか？

藤沢：職安を通したものは横手駅です。もちろん、その会社から迎えがきている場合もあ

るでしょうけど、たいてい上野駅に会社の人が迎えに来ていて、そこでみんなと別れるわけです。職安の人が横手駅で人員を数えて送り出していたんですね。清五郎のような場合には後三年の駅に送っていったのです。そういうときには、同級生がみんな送って行ったんですよ。

紀子：私も送っていったのを覚えています。それで、みんな後三年駅からかと思っていたら、栄子さんは、横手駅で会社の人が迎えに来たと言っていました。

藤沢：職安に最初から申し込んだ企業の場合には、横手駅だった。あちこちの学校から生徒が来るだろうし、職安の人がまとめて乗せたと思う。

それから、2年時に英語が選択教科となる。それは、本人の希望で決まるのだけれど、担任が就職より進学したほうがいいのではないと思われる生徒には、話をして変えさせることもあった。

紀子：それは、選択の幅があるということですか。

藤沢：まだ、2年生だということもあるし、進学しようとするれば、英語を選択しておかなければいけないので、そういう可能性のある人には、英語を選択しておいた方がいいのではないかと話していた。

紀子：赤川満という人も途中で変えたと言うことで、今、市役所に勤めているらしい。

藤沢：横手高校が何かに進んだと思う。美和子さんは、純然たる縁故就職だったと思う。

紀子：前に聞いたとき、お姉さんの勤めていた理髪店に住み込みで行くことになり、そこで、横浜高校の別科だった理髪科に2年間通わせてもらって、国家試験を受けたといっていました。（ここで、東京ぐみの状況説明をしている。新吾さんははじめ地元就職だったことなどや、清五郎さんのことなど）みんな、いろいろな経過を辿りながら定着していったんですね。

当時、職業科でならった十露盤などは役にたったといっていました。

藤沢：当時、必修教科の技術・家庭科というのが1年から3年まであって、これは、男女でわかれていた。女子は裁縫をしていたと思う。男子は外の仕事などしていたと思う。（草むしり、畑仕事など）このほかに、二年時から選択の職業科があったが、これを鎌田先生が担当していたのでしょう。

たいてい、3月末か、4月初めに就職していくとその年の8月、夏休みに学校から職場補導ということで、職業科担当の先生が、予算があれば学級担任も生徒に会いに会社を訪ねたのです。私も2度ほどいったことがあります。職業科の先生は鎌田先生のあとには、畠山先生がしていたので、私は畠山先生と一緒にいったことがあります。そのときの写真があります。たぶん、美和子さんたちの学年ではないと思うけど、誰だかわからない。

紀子：先生、若いですね。

藤沢：たしか、蒲郡だと思います。畠山先生と一緒にです。生徒は誰かわからないけど。

紀子：蒲郡ですね。栄子さんたちに聞けばわかると思います。富子さんにも似ているけど。これ、お借りできますか。前後の学年であれば、晶子さんたちにみてもらえばわかると思います。職場補導というのはどういうことをするのですか？

藤沢：その写真はあげますよ。（ということで、もらってきた）会社に前もって何時行くかを予告して訪問するんですけど、生徒たちが、駅まで迎えに来ていたりするんです。

紀子：お休みがもらえるんですか？

藤沢：その時間だけです。会社のロビーのようなところや、応接室のようなところで、1-2時間話

すのです。どうも、行ってみると、会社のほうではそう長くは話させないような感じで、外に出るということはなかったのです。あまり、いろいろ話されては困るというようなことがあったのかもしれない。聞いてみるとあまり、厳しいとか、難儀だとかは言わなかったですね。蒲郡からは二つか三つの会社が入ってきていたと思います。

紀子：ああ、そうですか。会社もいつも求人する学校を決めていたんですね。

会社の中じゃあまり、いろんなことを訴えられないですね。

藤沢：健康状態とか、仕事の内容、待遇などで、最初の話と違っていることはないかというようなことを聞いたんです。給料なんかは、思ったより多くもらっているなあと私は思ったんですけど。私は、当時月2万円そこそこの給料だったと思います。生徒たちの募集要項をみると月2000円とかあるので、安いのではないかとおもったけど、他の会社のは4000円とかになっていたりして様々だったと思います。

紀子：募集の時に2000円とか4000円とかといわれていたのが、違っていたとか言うことはなかったですか。

藤沢：ええ、それは、なかったようです。

紀子：富子さんなんかはよく覚えていて、3食付き2000円の給料のなかから天引き貯金までさせられていたといっていました。

藤沢：聞いてみるとみんな貯金させられているようでしたね。

紀子：戦前の紡績女工さんたちも、やめるときに親にまとまったお金を渡せると言うことで、貯金させられていましたが、それと、同じような慣行がのこっていたんですね。もちろん、戦前のように、100円とか、150円の前借金を親がして子どもを送り出すというのは違って、本人との契約ですから、貯金の持つ意味も違ってはいますけど。

進路指導について、先ほど3年の2学期の半ば過ぎに始まると言っていました。

藤沢：ええ、就職担当の先生と個別に面談して、家庭の方にも連絡して決めていくということで、学級担任はノウ・タッチでしたね。

紀子：担任抜きという形で進むんですね。就職担当の先生が個別に職安からきた資料などを見せて相談していくということですね。決めかねているとか、決まらない何ていうことはなかったんですか。

藤沢：県外はそれで、すぐ決まるんですけど、県内、特に横手市内希望者はなかなか決まらなかったですね。

紀子：それは、受給関係が問題になっているからですか。

藤沢：職場が不足しているということですね。

紀子：それでも、市内に居たいということですか。

藤沢：居たいというより、家で遠くには離さないから市内でというのが多かったです。忙しいときには、家の手伝いをしてもらいたいからまず、こころへんに居ろということですね。

紀子：それは、農繁期ですね。先行研究で、もう少し前の時代には、育ててもらったお礼奉公に3年ぐらい家で手伝いをしてから、遠くに就職してもいいと言われていた時期があったといっています。高度成長が始まりそうになってきた頃には、そんなことをしていたらいいところに就職できないといって、すぐ出すようになったというのです。ここでも、それに似たようなことがあったんですね。

藤沢：そうですね。たとえば、大工や左官などの場合丁稚奉公だから、何年間かお礼奉公も必要

になって、忙しいから家の手伝いをしてとかはいえない。それ以外の仕事となると、なべの蓋を作る工場のようなところとか、限られてくる。

紀子：新吾さんのような一人前の大工とかではない労働なら家の手伝いもできるということですか？

藤沢：1週間ぐらいなら休暇をもらえるということですね。今は、そんなことしていたらすぐ、首だけれども、当時は学校も農繁期休みがあったぐらいで。

紀子：どんな仕事か、ここいらではあったんですか？

藤沢：角鶴という瓦や土管を作る工場があったね。それから、福助という地下足袋やゴム長を作っている工場もあった。

紀子：そんなに多くの職場がなかったということですね。どうしても、就職しなくてはいけない人は県外にでていったということですか。手伝わせられる畑や、田圃がある親は近くにおいておき、農繁期などに手伝わせたいという要求があったということですかね。あとは、あまり、遠くに離したくないということですね。

藤沢：上の兄弟が県外に就職しているとそれを頼って行くという傾向がみられましたね。縁故就職だけではなく、職安からのでも就職していった姉や、兄が、お盆や正月に着飾って帰って来るのをみて、いいなあってあこがれていたというようなことがあったと思います。

紀子：大分わかりました。先生の簡単なライフ・ヒストリーを教えてください。先生は何年生まれでしょうか。

藤沢：大正15年生まれです。昭和35年の時は34歳だと思います。地主の次男であった。横手中学を卒業後、神奈川県にあった海軍技師学校？ に昭和19年に入学したが、翌年終戦で、帰郷し、農業を手伝ったりしながら、役場で臨時に働いていた。次に、村にできた中学校の事務員として勤めたが、中学校の先生を捜しているというので、事務員だと給料も悪いと言うことで、先生として採用してもらったのです。

以上